

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 2 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2014

課題番号：22520436

研究課題名(和文) 印欧語比較言語学理論に基づくゲルマン語動詞体系生成過程に関する研究

研究課題名(英文) An approach to the genesis of the Germanic verb system on the basis of comparative IE linguistics theories

研究代表者

田中 俊也 (Tanaka, Toshiya)

九州大学・言語文化研究科(研究院)・教授

研究者番号：80207117

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：印欧語比較言語学諸理論及び独自の「形態的混交説」の立場から、ゲルマン語動詞体系生成過程の解明を目的とした研究を継続した。過去現在動詞の形態的発達については、2011年に英語で著した書を国内出版社から出版した。この書は、3つの国際に書評が載り、M. KuemmelによるLIV2の補遺でも2箇所言及されている。同書は、Rindall & Jones (to appear) TPhS 113 で、Grimm (1848) を端緒とする過去現在動詞研究史の中での最新の研究成果と位置づけられている。強変化動詞体系に関わる諸問題については、全国規模の学会での口頭発表を3回行った。

研究成果の概要(英文)：For these years I have been based on some up-to-date comparative IE linguistics theories as well as my own 'morphological conflation theory' to investigate into the issue of how the PGmc. verb system arose from the previous (pre-PGmc. or PIE) counterpart. As for preterite-present verbs, I published a monograph about their historical development in 2011. Three reviews of this work have appeared in prestigious international journals (JIES 39, Kratylos 57, IJDF 11), while M. Kuemmel's Addenda und Corrigenda zum LIV2 refers to two of my ideas proposed in Tanaka 2011 (s.v. *kann- 'know' and *mag- 'have power'). Randall & Jones (to appear) TPhS regards my work 2011 as the latest substantial study of the relevant verbs among those which had originated with Grimm's 1848 analysis. Furthermore, I delivered four oral presentations upon some problems related to the development of the PGmc. strong verb (I-VI) system in the JSHL 1st and 2nd conventions, the JLS 145th convention, and the LVC 2014.

研究分野：歴史言語学

キーワード：Verb System Proto-Germanic Strong Verbs Preterite-Present Verbs Proto-Indo-European Morphological Conflation Morphological Change Old English

1. 研究開始当初の背景

印欧語比較言語学研究の歴史において、20世紀初頭にヒッタイト語とトカラ語が発見されたことは重要な出来事であった。この発見は、印欧語族に属する語派が単に二つ増えたということに留まらず、比較言語学理論の発展に大きく寄与することになった。19世紀後半の F. de Saussure の提唱に端を発する「喉音理論」は、ヒッタイト語に喉音の直接的反映が見つかったことから20世紀の間に多くの議論が展開され、その結果、20世紀の終わり頃には3つの喉音を祖語の音韻体系に設定するという考えが遍く受容されるようになった。また、19世紀から受け入れられていた「強形 *CéC-* vs. 弱形 *CC-*」および「強形 *CóC-* vs. 弱形 *CC-*」の形態的交替以外に、様々な型の（アクセントとアブラウトに関する）交替が祖語の形態組織に存在したという見解が、20世紀の終わり頃までに広く受け入れられるようになった。（20世紀前半の H. Pedersen, F. B. J. Kuiper らによる研究から出発し、J. Narten や J. Schindler らが1960年代から70年代にかけて更に発展させ、その後強い研究動向を形成することになった）。これは「アクセントとアブラウトの型理論」と呼ばれるが、ヒッタイト語やトカラ語にもそれらの交替を示す活用例が（直接的または間接的に）観察できることが理論形成に有力な根拠を与えることになった。20世紀の間に成し遂げた理論面での大幅な発展の恩恵を受け、21世紀の印欧語比較言語学研究は更なる強力な進展を遂げようとしている。あらゆる語形の形態分析を行うにあたり、印欧祖語の音韻体系には3つの喉音が存在したということが前提とされるが、これに基づいてこれまで発見されなかった音韻法則が次々と明らかにされつつある（例えば、Hackstein 2002 *HS115* による **CC.HC > *CC.C* の発見、Melchert 1994 *Anatolian Historical Phonology*, Amsterdam や Jasanoff 2003 *Hittite and the Indo-European Verb*, Oxford によって提唱される **-óHe# > *-óHu#*、などである）。新たな音韻法則の発見により、従来十分な歴史的説明ができなかった語形に、より説得力のある説明が与えられるようになりつつある。また、アクセントとアブラウトの型理論の観点から、祖語におけるそれぞれの名詞類および動詞の形態がどのような交替型に従って活用していたのか、研究が急速に進展しつつある。その結果、従来の各語派の形態分析に関するハンドブック（や語源辞典）は、書き替えられつつある（LIV 2001 のほかに、例えば、ゴート語名詞類形成に関する Casaretto 2004 *Nominal Wortbildung der gotischen Sprache: Die Derivation der*

Substantive, Heidelberg など）。

これらの理論的發展に対して、私が解明を目指すゲルマン語動詞体系の生成過程の研究は現在どのような状態にあるだろうか。前世紀後半に出版された Bammesberger 1986 *Der Aufbau des germanischen Verbalsystems*, Heidelberg では、祖語に明示的に3つの喉音を設定するに至らず、アクセントとアブラウトの型理論も満足に適用できていない。その段階で、過去現在動詞の現在形や強変化動詞 IV, V, VI 類の過去形の形態に関して、妥当な説明が与えられていない状態であった。他方、今世紀初頭に出版された Ringe 2006 *From PIE to PGmc.*, Oxford では、祖語における3つの喉音をはっきり仮定し、Cowgill の法則 (**h₃ > *k / *R__w*) などの喉音が関与する音韻法則も明示している。アクセントとアブラウトの型理論は、全面的に取り入れられている。が、それでも Bammesberger 1986 と同様、過去現在動詞生成過程の詳細な分析は与えておらず、強変化 IV, V, VI 類の延長階梯を示す語幹 (IV, V pret. pl. *-ē-*; VI pret. sg. and pl. *-ō-*) の生成過程については未解決のままとしている。私の考えでは、従来十分な説明が与えられなかったこれらの奇異な動詞形態も、①喉音理論に基づく音韻法則、②各動詞の各活用形の祖語におけるアクセントとアブラウトの型 (acrostatic I and II, mesostatic, proterokinetic, holokinetic, amphikinetic, hysterokinetic など) の解明、③ゲルマン語固有の形態変化、を適切に組み合わせれば、十分説得力のある形でそれらの発達過程を解明することができると思われる。最新の理論を有効に適用し、未解決の問題に新たな説明を与えることによって、印欧語そしてゲルマン語の研究をさらに前進させることが本研究の目的である。

2. 研究の目的

平成22年度から平成26年度の5年間にわたり、印欧語比較言語学の新たな理論の発展から得られる知見を十分に活用して、ゲルマン語動詞体系生成過程を明らかにするに研究を行いたい。換言すれば、これまでの比較言語学研究でその生成・発達過程が十分に明らかになっていないゲルマン祖語の動詞活用組織に関して、十分に説得力のある通時的説明を構築することが本研究の目的である。喉音理論 (laryngeal theory) に基づいて新たに発見されつつある音韻諸法則を適用することに加え、印欧祖語の語形成におけるアクセントとアブラウトの型理論 (theory of the accent and ablaut patterns) に基づく形態分析を更に押し進めて、ゲルマン語動詞形態の体系的発展の過程の解明に貢献することを目指すものである。

3. 研究の方法

ゲルマン祖語動詞体系は、強変化動詞、弱変化動詞、過去現在動詞、不規則動詞から成り立っている。強変化動詞について、IV, V 類の過去複数形に延長階梯の母音 **-ē-* が示され、VI 類では過去形全般に延長階梯の母音 **-ā-* が示される。また、すべての過去三人称複数形について、語尾に祖語の完了形語尾を反映した **-ur* (<**-rs*) ではなく、由来がはっきりとしない **-un* (<**-nt*) が見られる。ゲルマン語の強変化過去は祖語の完了形の継承であるというのが、従来有力な説であった（近年では特に Ringe 2006; Jasanoff 2007 *HS* 120 参照）。しかし、純粋に完了形だけの反映という考えでは特異な形態の由来を説明するのに限界があり、完了形と他の動詞形態との形態的混交 (morphological conflation) をゲルマン語固有の動詞形態発展過程として考えるのが妥当だと私は予想している。（ただし、従来唱えられてきた、完了形と語根アオリスト形の混交という仮説のままでは、十分な説明はできない; cf. Tanaka 2010）。過去現在動詞の現在形も、従来印欧祖語の状態的完了形 (the stative perfect) の反映だと考えられてきたが、これも同様に、状態的完了形と他の動詞形態の混交と考える方が、より説得力のある説明が得られると考えている (cf. Tanaka 2009 *Genesis*)。

この考えを論証するために、「語等置の方法」 (the method of word equation; cf. Jasanoff 2003) を用いて、各グループに属する個々の動詞の経験的分析をすることが必要になる。

「語等置の方法」とは、(印欧語) 比較言語学研究を実行する際に最も有効な「比較再建の方法」 (the method of comparative reconstruction) の基礎を成す手順である。各印欧方言のどの語 (のどの活用形) が他方言のどの語 (のどの活用形) と比較されるべきかを適切正確に判断し、その作業の積み重ねを通じて、やがては印欧祖語から各印欧方言への言語構造の推移・発展のありかたを体系的に説明することに最も着実に通じると考えられる手段である。この方法に基づく厳密な分析を経て、どの動詞のどの活用形が組み合わせられて、ゲルマン語の各々の動詞グループに特徴的な特異な形態が発展したのか、新たな形で解明されるようになると期待できる。

4. 研究成果

ゲルマン語の動詞体系を構成する 4 種類の動詞群のうち、過去現在動詞 (preterite-present verbs) の分析を、英語を用いた単行本としてまとめ (2011 年 3 月発行)、国際的な評価を得たのが、第 1 の具体的な研究成果として挙げられる。過去現在動詞は、印欧祖語の畳音完了能動態と語幹形成母音によらざる現在中動態 (あるいは畳音完了中動態) が前ゲルマン祖語の時代に混交することによって生じたとする、「形態的混交説 (morphological

conflation theory)」の立場からの説明は、国際的反響を得た。同書発行後間もなく、Kümmel, Martin *Addenda und Corrigenda zu LIV*² (<http://www.martinkuemmel.de/liv2add.html>) において、同書が提案した **kann-* ‘know’ および **mag-* ‘have power’ の発達過程の分析について言及がなされた。(即ち、目下最も権威ある印欧祖語動詞辞典である 2001 年発行の *LIV* 第 2 版の補遺で、取り上げられた。) また、国際的に権威ある歴史・比較言語学関係の専門誌 3 点に、それぞれ同書の書評が出て、それぞれに同書の価値を論じている (Ringe, D. 2011 *JIES* 39, Kim R. I. 2012 *Kratylos* 57, Frotscher, M. 2014 *IJDL* 11)。また、Ringe D. は 2014 年発行の『英語の言語学的歴史』第 2 巻 (Oxford UP) の 515 頁で、同シリーズ第 1 巻 (2006) で論じた過去現在動詞の発達についての自説の代案となる説明として、拙著 (Tanaka 2011) に言及している。また、*TPhS* 近刊掲載予定として、その原稿が 2014 年にオンライン上に掲載された (<http://onlinelibrary.wiley.com/journal/10.1111/ISSN1467-968X/earlyview>)、Randall, William and Howard Jones “On the Early Origins of the Germanic Preterite Presents” では、その第 2 節「過去現在動詞の由来についての先行研究」において、Grimm 1848『ドイツ語の歴史』による「強変化動詞起源説」から始まる諸学説の一番最後に、(8 番目の) 最新の学説として、拙著 (2011) の「形態的混交説」による分析を挙げて、紹介・検討を行っている。

「形態的混交説」は、ゲルマン語動詞体系の過去現在動詞の分析のみに留まるものではなく、過去現在動詞 (の現在形) と強変化動詞 (の過去形) との形態的類似点および相違点双方に説明を与えられる理論であることを、複数の学界発表、および複数の論文で明らかにすることができた点が、2 番目の重要な研究成果として挙げられる。強変化動詞 (少なくとも I 類から VI 類について) は、印欧祖語の畳音完了能動態と語幹形成母音によらざる未完了能動態 (アムフィキネティック型およびアクロスタティック 1 型 = Narten 型双方の未完了形) が前ゲルマン祖語の時代に混交することによって発達したと仮定すれば、これまで未解決だった問題が様々に解明できることを論証した。

近年の Schumacher, S. (2005) (XI Fachtagung) の「*bi-getun* 規則」による説明も含めて、過去の学説では、強変化動詞 IV, V 類の過去複数形に生じる長母音の由来について、満足のいく説明ができないことを論証し、新たな説明のあり方を示唆したのが、雑誌論文③ならびに学会発表④である。

強変化動詞 IV, V 類の過去複数形に生じる長母音の説明として、なぜ Schumacher, S. (2005) (XI Fachtagung) の「*bi-getun* 規則」では妥当な説明とならないのか、その詳細を論じ、「形態的混交説」による具体的代案を示したのが、学会発表③である。

更に、強変化動詞V類過去複数形ではヴェルナーの法則による語根末摩擦音の有声化が散発的にのみ見られ、それに対して強変化動詞I～III類の過去複数形では語根末摩擦音の有声化がほぼ規則的に見られるのはなぜか、「形態的混交説」からの説明を試みたのが、雑誌論文②および学会発表②である。

過去現在動詞と強変化動詞の間にある、2つの（一見無関係に思われる）形態音韻的相違点について、「形態的混交説」の立場を取れば、それらの隠された関連性が明らかになる可能性があることを論じたのが、雑誌論文①と学会発表①である。双方の動詞のIV、V類の（前者では現在、後者では過去）複数形態の語根母音の顕著な相違、およびゴート語での文法的交替（grammatical change）の有無（ゴート語では、過去現在動詞現在複数形にはヴェルナーの法則適用例が見られるのに対し、強変化動詞過去複数形では同法則適用例が見られないこと）について、それらが「形態的混交説」の立場から統一的な説明が与えられる可能性があることを論じている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

- ① Toshiya Tanaka “Remarks on Two Morphophonological Differences Between Strong and Preterite-Present Verbs in Germanic” 平成27年（2015年）3月20日発行 九州大学英語英文学研究会『英語英文学論叢』第65集、pp.13-22.（査読なし）
- ② 田中俊也「ゲルマン語強変化動詞V類過去複数形に散発的に見られる語根末摩擦音の有声化について：*wes- ‘be, stay, dwell’ の事例を中心に」平成25年（2013年）11月30日発行 日本歴史言語学会『歴史言語学（*Historical Linguistics in Japan*）』第2号、pp.3-20.（査読あり）
- ③ 田中俊也「ゲルマン語強変化動詞IV、V類の過去複数形をめぐる考察」平成25年（2013年）3月18日発行 九州大学英語英文学研究会『英語英文学論叢』第63集、pp.67-112.（査読なし）

〔学会発表〕（計4件）

- ① Toshiya Tanaka “Remarks on Some Morphophonological Differences Between Strong and Preterite-Present Verbs in Germanic” LVC (Language Variation and Change) Research Forum 2014, Saturday 24th May 2014, at the Ito Campus, Kyushu University, Fukuoka City, Fukuoka Prefecture.
- ② 田中俊也「ゲルマン語強変化動詞V類過去複数形に散発的に見られる語根末摩擦音の有声化について：*wes- ‘be, stay, dwell’

の事例を中心に」日本歴史言語学会第2回大会（平成24年（2012年）12月8日、千葉大学西千葉キャンパス、千葉県千葉市）

- ③ 田中俊也「ゲルマン語強変化動詞および過去現在動詞IV、V類に見られる形態的差異について：Schumacher (2005) 論考の批判的考察と形態的混交説からの提案」日本言語学会第145回大会（2012年11月24日（土）九州大学箱崎キャンパス、福岡県福岡市）
- ④ 田中俊也「ゲルマン語強変化動詞IV、V類の過去複数形をめぐる考察」日本歴史言語学会第1回大会（平成23年（2011年）12月18日、大阪大学豊中キャンパス、大阪府豊中市）

〔図書〕（計1件）

Toshiya Tanaka *A Morphological Conflation Approach to the Historical Development of Preterite-Present Verbs: Old English, Proto-Germanic, and Proto-Indo-European* (The Faculty of Languages and Cultures Library II), xiii + 320 pages. Fukuoka: Hana Shoin. ISBN: 978-4-903554-91-4, ¥4,700

〔産業財産権〕

○出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 俊也 (TANAKA, Toshiya)
九州大学大学院言語文化研究院 教授
研究者番号：80207117

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者 ()

研究者番号：